地域の底力――答志島

三重県鳥羽市

# 「寝屋子」制度を受け継ぎ豊かな風土や自然を体験できる鳥羽市・答志島を訪ねて

伊勢志摩国立公園の中にある答志島。豊かな海産物に恵まれ、美しい自然や古代から続く文化や祭りを大切に守り伝える島である。人口減、高齢化といった離島につきものの悩みに直面しつつ、島が持つ資源を活かし、島の人々の発案と協力によってグリーンツーリズムを発展させ、地域を活性化させている答志島を訪ねた。

取材・文 千葉 望　写真 栗原克己

高台から答志港を見下ろす。季節や時間帯により、さまざまな魚介類が捕れるためひっきりなしに船が出入りする。

## 「ありのままの島」を資源として活用

三重県鳥羽市・佐田浜港から定期船に乗って二〇分、答志島の和具までは穏やかな内海だったが、そこから一五分ほどかかる答志への航路は外海にかかり、波が荒くなった。小さな島を取り巻く大きな自然の変化が、船の揺れからじかに伝わってくる。窓から外をうかがうと、二人乗りの船が港に向かっていた。どうやら、男女が乗っているようだ。夫婦だろうか。

港には釣り客や、鳥羽市街で買い物などをしてきた地元の人々が降り立った。答志島は鳥羽市のそば、飛び石のように連なる島々の中では最も大きい。周辺を神島（三島由紀夫の小説『潮騒』の舞台）、坂手島、菅島などが取り囲み、変化に富んだ風景を織りなしている。

港が目の前に見えるホテルに落ち着き、外を眺めるうちに、次々に漁船が帰港してきた。一人乗り、二人乗り、もう少し大きな船と種類はさまざま。岸壁に沿って市場が建ち、朝から昼にかけて、いろいろな海産物のセリが行われるという。浜には小屋が幾つも立てられており、それがいわゆる「海女小屋」であろうと思われた。

日本列島はどこへ行っても海の恵みを与えられている。中でも答志島周辺は優良な漁場として知られてきた。だが、最近は環境の変化によって漁獲量が激減し、価格も低迷している。それに伴う後継者難、人口減、高齢化の問題は、日本の地方の多くが抱える悩みそのものである。

今も魅力がないわけではない。温暖な気候、恵まれた自然、海産物など、都会から来た者にとっては実に魅力あふれる島であり、観光地化していないところがかえって気持ちを落ち着かせてくれる。伝統の海女の文化も物珍しい。

それらの魅力をもっとうまく伝えて、答志島の活性化につなげられないか。そう考えて設立されたのが、「島の旅社」である。「社」とついてはいるものの、株式会社ではない。答志・和具・桃取の三集落の町内会、答志島の旅館組合、鳥羽磯部漁業協同組合に加えて、各町内の老人会や婦人会で構成される「島の旅社推進協議会」がその中心である。コンセプトは、島を訪問する人に、

「ありのままの島の生活を体験してもらい、島の活性化を島全体で考え、島の人々の手で『島の旅』をプロデュースする」

「島の旅社推進協議会」代表の山下伴郎さん。答志島に生まれ育った。市議会議員として活躍した後、「島の旅社」代表に就任。かつては「寝屋親」を務めていた。

というもの。平成十三年度に「二〇〇五年鳥羽市戦略プラン作成委員会」によりワーキンググループが結成され、その後の調査や視察を経て、平成十六年度に「島の旅社推進協議会」が設立された。十三年度当時、市議会議員を務めていた「島の旅社」代表・山下伴（とも）郎（お）さんが話す。

「準備委員会を動かしていたのは市役所職員有志でした。そのメンバーが答志島の調査を地元に呼び掛け、海産物・植物・食事・方言・行事などいろいろなことを調べてもらって、それを基にどのような企画を進めていくのか、議論しました。その後、補助金が付く助成団体として社ができたんです。今では人件費程度を自分たちで稼いでいます」

いわば、島の「宝探し」である。ずっとその土地に住んでいると、恵まれた環境や伝統行事が当たり前すぎて、高い価値を生み出すことになかなか気付かない。調査活動によって、初めて分かったことも多い。

ワカメの収穫期を除いて「島の旅社推進協議会」事務局長として活躍する大阪出身の山本加奈子さん。答志島のサワラの一本釣り漁師と結婚して10年、島に「外部の目」を持ち込み、今では誰よりも島に詳しい。

## まずは「島の宝探し」からスタート

「島の旅社」のメンバー、山本加奈子さんは大阪府出身。海には縁のない育ちだった。島で行われた他地域との交流イベントに参加した際に現在のご主人と出会い、平成十四年に和具の集落に嫁いできた。外からやって来た嫁だから気付くことがたくさんある。

「私には衝撃的なことばかりでした。一つ一つが面白かったし、たぶんそれにはいわれがあるはずなので、知りたいと思ったのです。ところが主人に尋ねても、『知らん。そんなの昔からや』の一言で（笑）。そう言われると、私の疑問はどんどん膨らんでいくんです。それがきっかけとなり、『島の旅社』のお手伝いをするようになりました」

以来一〇年近く。社が運営するさまざまな体験イベントなどを通じて、普段交流のない答志や桃取の集落の人たちともすっかり顔なじみになり、地元出身のご主人よりも広い人脈ができた。

「島の旅社」が中心になって行う「島の旅」は、主に女性たちが中心になってプロデュースされる。「島のかあちゃん」たちである。彼女たちは山本さんがそうであるように漁師の夫を持ち、自分も船に乗って魚を捕る手助けをしたり、ワカメ漁に加わったり、海女として海に潜ったりしている。その上で家事や子育ても担うたくましさを持っている。食文化の担い手でもある。地域のこともよく知っているので、企画立案にふさわしい。

山下さん、山本さんと答志島の集落をしばらく歩いてみた。平地が少ないので家々は密集しており、そのあちこちに丸で囲んだ「八」のマークが描かれてある。船にもある。

「この辺りは八幡信仰がありますので、八幡様のしるしです。魔よけですね」（山下さん）

名産であるタコを捕るための

左／答志島で活躍する海女さんたち。中央が中村加寿代さん。現代の海女はウエットスーツで潜る。（写真提供：島の旅社推進協議会）　下／島のあちこちで見掛ける「八に○」のしるし。八幡信仰が盛んな島では魔よけにこのしるしを書き付ける。

タコつぼが積まれ、家の前のいけすの中にはサザエやイセエビなどが見える。海から上がったばかりのウエットスーツの海女さんが、自宅前の水道で海水を流す姿にも出会った。七〇歳はすぎているだろう。経験がモノを言う海女の仕事では、高齢がハンディキャップにはならない。浮力のおかげで、関節の痛みなどにも悩まされずに済む。

島には神社のほかに、縄文時代以降の遺跡や古墳もあって、長い歴史を感じさせる。平城京跡から出土した木簡には、朝廷にこの島の海産物を献上していた記録もあるそうだ。掘り下げていけば、いくらでも面白い話が出てくることだろう。

## 多彩なプログラムで訪問客を増やす

今運営されている「体験学習」には以下のようなものがある。

**浮島（うきしま）自然水族館**　建物がある わけではない。桃取の沖にある無人島に行き、大潮の日の干潮時に現れる磯場でいろいろな水生動物の観察をする。

**つかみどり体験**　プールに放したタコや魚をつかみどり

**干物づくり**　魚の開き方を学んで干物を作る

**魚釣り体験**　港の岸壁から魚を釣る

**路地裏スタンプラリー**　狭く入り組んだ路地裏を歩き、地元の人たちと触れ合いながらチェックポイントを回る

このほか「テングサ（寒天の材料）干し」「答志市場見学」「貝紫染め」「海水浴」「漁師さんの話」など盛りだくさん。答志島は観光地として開発されているわけではないので、地元の人たちの生活をそのまま見て、感じられる利点がある。どれも、海辺で育てば当たり前の営みばかりだが、町や都市からやって来る人々にとっては目新しい体験なのだ。小学校の体験学習で三泊四日など、長めの宿泊も多い。

体験企画のうち特に人気なのが、海女さんの話を聞き、海女小屋で捕れたての海産物を焼いて食べることだ。「島の旅社」が持つ海女小屋内部は、幾つもの炉がしつらえてあり、炭をおこせるようになっている。壁や柱には脱皮した後に残されたイセエビの殻や漁具などが飾られ、野趣にあふれていた。

「漁師の人たちが休みの時に、『ちょっと助けてくれ』と声を掛けて作ってもらいました。山から

体験学習の子供たち。大潮の時期に島を訪れ干潮で現れた磯場で、海の生物に直接触れて大騒ぎ。（写真提供：島の旅社推進協議会）

上／捕れたての魚をさばいて干物作りを体験する子供たち。包丁を使う手つきもおぼつかなかったのに、すぐに上達。　右／島の集落を歩いて回る。島の人たちはみな親切で、いろいろなことを教えてくれるという。（写真提供：島の旅社推進協議会）

竹を切ることから始めて、みんなで設計図を作り、ここをこうしたほうがいい、ああしたほうがいいと話し合いながらできたものなんです」（山下さん）

山本さんも、島の人たちはみな生きる知恵があると感じている。自分たちで何でも工夫し、作ってしまう。

海女の仕事には漁期があるので、繁忙期は無理だが、仕事にゆとりがある時期には何人かの海女さんが「島の旅社」に協力して、子供たちに仕事の話をし、魚介類を焼いてもてなしてくれる。その一人が中村加寿代さんだ。中村さんは島に生まれ、島から本土のブティックや真珠店に通勤していたこともあったが、島の仕事が好きで、海女になったという。海女としてのデビューも三〇歳ぐらいと遅かった。

「私たちは子供のころから遊びを通じて潜ることを覚えているので、ウエットスーツを着て潜り始めたのがそれぐらいということですね」（中村さん）

潜って捕るのはウニやアワビ。とりわけ立派なアワビを見つけた時の喜びは大きい。見つけた時の嬉しさ、捕った時の嬉しさ。それがあるので海女をやめられない。

「海女小屋では捕れたてのアワビを焼いて食べてもらうんですけれど、みんな喜んで食べてくれますね。これが本当のアワビの味だと分かってもらえるんです」

来る人たちは大人も子供も、「海女＝白い装束」と思っている。だが一般の海女はほとんどがウエットスーツ。「海女さんってどこにいるんですか？」と訊かれ、「ここにいるのがみんなそうです」と答えて驚かれることも多い。日本全国ではいまだに海女が二〇〇〇人ほどいるといい、海女文化は静かに、だがしっかりと受け継がれてきているのである。

豊かな海を全身で感じながら育ってきた中村さんは、現代の子供たちに少しでもその体験を分け与えたいと願っている。海は危険だと遠ざけるのではなく、自然の声を体で聴く大切さ。それを最も敏感に感じ取るのはやはり子供たちである。

「『浮島自然水族館』で大潮の時、船に乗って浮島の磯場に行きますよね。行く前は怖がって船に乗れない子が、みるみるうちに変わるんです。生き生きとして、好奇心をいっぱいにして目が輝きだす。帰りには自分から船に乗る。

海女の中村さん。以前はブティックや真珠店に勤めていたが、島の仕事が好きで海女になった。自分のテリトリーの地形や潮の流れについては何でも知っている。

左／島で捕れるたくさんの魚介類。家の前には水槽が置かれ、生きたエビや貝を目にすることができる。　下／海辺に作られた「島の旅社」の海女小屋では、新鮮な魚介類を炭で焼き、そのまま食べられるので子供たちや観光客に大人気。最高のグルメ体験である。（写真提供：島の旅社推進協議会）

子供の力は凄いです」

と中村さんが驚く。今では学校の教師たちも自然体験が少ない世代が中心。教師や子供の感動が口コミで広がり、今ではたくさんのリピーターが島を訪れるようになった。子供だけではなく、大人にも海のグルメを味わえる旅は人気で、豪華客船のオプショナルツアーで訪れた人もいた。

「豪華な食事をしているはずなんですが、こういう素朴な味も嬉しいんですね」（中村さん）

最近では中国など海外からの訪問客が増えた。飾り気のない日本の魅力が味わえると人気を集めている。

## 人の結び付きを育てる「寝屋子」制度

習俗を受け継ぐ大切さは、どの世界でも同じかもしれない。答志島では、今でも守られる伝承の「しくみ」がある。それが一〇代後半を迎えた長男を中心とする「寝屋子」と、これらをあずかる「寝屋親」の制度である。日本では南方を中心に古くから「若衆宿」や「娘宿」の習俗があった。若者たちが集まって寝泊まりし、そこで集団生活の知恵を学び、年上の者が年下の面倒を見る。一定の年齢になったり、結婚すると抜けていく。義理の兄弟姉妹や親子にも等しい関係である。だが時代とともにその習俗は廃れていった。ところが答志島では今でも生きている。山下さんは、かつては「寝屋子」であり、つい最近まで「寝屋親」として、若者たちの面倒を見てきた。自宅の一室を提供し、金曜の夜から若者たちが寝泊まりして生活を共にする。「寝屋親」はあまり口を挟まず、若者たちの自主性に任せるが、道を踏み外すことがないように目配りをすることは言うまでもない。

「一緒に生活することで、横のつながり、縦のつながりが深くなり、一生の付き合いになっていきます。僕が若いころにはとにかく長男は『寝屋子』として入る。それができないようなら家継ぎ失格とされてしまったほどです。他の寝屋子と肌合いが合わないというケースもたまにありますが、そういうときは周りが気を付けて、別の家の『寝屋子』になる。当時は毎晩一緒でしたが今は長男に限りませんし、集まるのも週末だけです。結婚すると抜けるのですが、残る方がだいぶ少なくなってきたら一応解散。今度は『朋友会』というグループになって、一生助け合いを続けます」

仲間が道を外れそうになったらどうするのか。そういうときには「誰の息子か」よりも「どこの寝屋子か」が真っ先に問われるほどで、それが抑止力になったものだという。そこに若い女性たちが来て、ゆるやかな監視のもとで青年と交流を深め、結婚に進む例もたくさんあった。

若者たちが週末共同生活を行い、交流を深める「寝屋子」制度。その活動を支えるための施設も整えられていた。

家々が接近している島では小路も縦横に張り巡らされている。子供たちは車の通らない小路で安心して遊ぶ。高齢者が押しているのは島の生活に欠かせない「じんじろ車」。

山下さんは「寝屋親」も務めたが、実の子が島の外に暮らしていても、「寝屋子」だった人々が何くれとなく気を使ってくれるので、安心して暮らせる。先日も留守をしている間に捕れたての魚が届けられていた。しかも冷蔵庫の中に、である。

本土に近いとはいえ、やはり海が荒れれば船は出せないし、定期船も欠航となる。孤立の可能性もある島では、何から何まで支え合わなければならない。濃縮された人間関係の中では、都会から見れば煩わしいことも多いだろうが、一方では人間を育てる昔ながらの力もある。漁業では家族だけでなく、もっと多くの人々が力を合わせなければならない。

また、山本さんのように島の外から来たお嫁さんや子供を交えて、仲間同士で旅行に行ったり食堂で食事会を開いたりと、島になじむための基盤作りとなっている。

「寝屋子」は、修学旅行でも個室に泊まる時代に時代遅れと思われるかもしれない。しかし同世代でさまざまな会話を重ね、ぶつかり合うことで、コミュニケーションの力が鍛えられる。少々のことではへこたれない力が育つだろう。

伝統を受け継ぎ、自然の恵みを活かして島の外から人々を受け入れる。答志島には土産物店もなく、派手な看板もない。人々の暮らしだけがある。

「それを物足りないと言う人もいますよ。海産物以外に土産物もないから。大きな案内板なんかもあえて置かないんです。それは島の人と直接接してほしいからです。迷ったら島の人に訊いてもらえれば、みんな教えてくれますよ。そういう触れ合いを楽しみに来ていただければいいと思っています」（山下さん）

島の人たちは至ってオープンである。それは、「寝屋子」で培われたコミュニケーション力があるからかもしれない。道路には信号が見当たらず、軽トラックやスクーターがのんびりと走っている。子供たちは海のすぐそばで遊んでいるが、大人たちがさりげなく目配りをしていた。高齢者も元気だ。

数日間、答志島に滞在するだけでさまざまなものが見えてくる。「見える」という話題をもう一つ。島の富士見の丘からは、晴れて空気が澄んだ日、はるかに富士山が眺められるという。

島では高齢者が元気で、子供にも目を配っている。子育てがしやすいからかきょうだいの数も多い。